中学校　第１学年　Ｅ　球技　ア　ゴール型「フットサル」

単元の目標

知識及び技能	競技の特性や行い方、ボール操作等について理解するとともに、基本的なボール操作と空間に仲間と連携して走り込み、マークをかわしてゴール前の空間をめぐる攻防ができるようにする。
思考力、判断力、表現力等	攻防における自己やチームの課題を発見し、合理的な解決に向けた運動の取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする。
学びに向かう力、人間性等	フットサルの学習に積極的に取り組むとともに、一人一人の違いに応じたプレイなどを認めようとすること、健康・安全に気を配ることができるようにする。

※共：単元全時間を男女共習で実施

	1	2　3　4	5　6　7
ねらい	競技の特性やボール操作等について理解するとともに、自己の課題を見つけることができる。	基本的なボール操作（インサイドキック、ボールキープ、ドリブル）を身に付け、簡単なゲームを楽しむことができる。	チーム全員が活躍するために、ルールを工夫し、空いた場所をめぐる攻防を楽しむことができる。
導入	準備運動（ストレッチの紹介を兼ねる） 競技の特性や行い方、基本的な動きについて理解することができるように、映像等を使って説明する。	共：（３）生徒同士が学び合いながら行う工夫 ・心と体をほぐすために、チームでコミュニケーションをとりながら準備運動を行う。（ペアやチームでストレッチ、ボールを使ってのストレッチや補強運動等）	
展開	ボール操作やプレイ中の動きの課題を見つけるために、試しのゲームを行う。 1 チーム 5～6 名（男女混合）とする。	動きのポイントを提示し、インサイドキック、ボールキープ、ドリブルの練習を行う。 共：（１）個人の技能に合わせて取り組むことのできるための工夫 ・生徒が自分の技能に合わせて練習に取り組むことができるように、提示された練習から生徒が選択できるようにする。 ・生徒が仲間と関わり合いながら繰り返しボール操作に挑戦できるように、2 人組で行う練習方法、5 人（チーム）で行う練習方法を提示する。 練習した動きを全員で確かめるゲームを行う。 行い方：1 チーム 3 名、ハーフコート 共：（２）チームの技能に合わせたルールの工夫 ・生徒が練習の成果を実感できるように、ゴールの大きさ、相手の人数を制限したゲームを提示し、対戦相手との話し合いのもとに選択できるようにする。 ゴールの大きさ⇒A：コーン 2 つ分、B：コーン 3 つ分、C：コーン 4 つ分 相手の人数⇒A：1 人、B：2 人、C：3 人	チームの構成：1 チーム 5～6 名（6 チーム） コートの使用：3 チームで 1 コート使用（A 対 B のゲーム中、C が動画を撮影する時間とする。） 行い方：1 チーム 5～4 名、5 分間、通常のコート ゲーム 1：A 対 B、A 対 C、B 対 C （各チームのプレイ時間を保証するため、時間制で行う。） 共：（３）生徒同士が学び合いながら行う工夫 ・試合終了後、チーム全員が活躍するためにどのような工夫が必要か考える。コート内の人数、コートの大きさ、ゴールの大きさ、パスの回数等 ・考えた工夫を対戦チームに伝え、ア：両チーム共通で設定すること、イ：チームごとに設定すること、を確認する。 ゲーム 2：A 対 B、A 対 C、B 対 C （各チームのプレイ時間を保証するため、時間制で行う。）
終末	今後の学習の見通しをもつことができるように、ボール操作やプレイ中の動きについての課題を話し合う。		自分や仲間が活躍できたことを確かめるために、ゲーム 2 の様子とゲーム 1 の様子を動画を見て比較し、工夫の効果（楽しさ・触る回数・得点数・ボールを持たないときの動き）を確かめる。 次時学習への見通しをもつことができるように、効果のある工夫について全員で共有する。
	振り返り（授業後アンケート）の記入		

評価規準

【知識・技能】
①インサイドキック、ボールキープ、ドリブルの動きのポイントを言ったり書いたりしている。
②インサイドキック、ボールキープ、ドリブルでボールをコントロールすることができる。

【思考・判断・表現】
①仲間と協力する場面で、分担した役割に応じた活動の仕方を見つけている。
②自分や仲間が全力ゲームを楽しむための方法を見つけ、仲間に伝えている。

【主体的に学習に取り組む態度】
①学習に積極的に取り組もうとしている。
②マナーを守ったり相手の健闘を認めたりして、フェアなプレイを守ろうとしている。

知識・技能		①	①	②			②
思・判・表				①	①②	②	
主	①						②

個人やチームの課題解決に適した活動やルールの工夫
中学校第１学年　Ｅ　球技　ア　ゴール型「フットサル」

１　単元の目標

○競技の特性や行い方、ボール操作等について理解するとともに、基本的なボール操作と空間に仲間と連携して走り込み、マークをかわしてゴール前の空間をめぐる攻防ができるようにする。【知識及び技能】
○攻防における自己やチームの課題を発見し、合理的な解決に向けた運動の取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする。【思考力、判断力、表現力等】
○フットサルの学習に積極的に取り組むとともに、一人一人の違いに応じたプレイなどを認めようとすること、健康・安全に気を配ることができるようにする。【学びに向かう力、人間性等】

２　共生を基盤とした授業づくりにおける仕掛け

（１）個人の技能に合わせて取り組むことができるための工夫

フットサルの授業で基本となる技能として、ボールコントロールがあげられる。パス、ボールキープ、ドリブルなどの基本的な技術が不十分な場合、チームに迷惑をかけてしまうという理由からボールをできるだけ触らず、コートの端にただ立っているだけとなってしまう生徒が出てしまい、結果的に勝敗に影響を与えてしまう場合がある。これを解消し、性差や技能差を補い、全員がボールに積極的に触ろうとする意欲を引き出すために、生徒が自らの技能に合わせて提示された練習から選択できるようにした【資料１】。

【資料１　選択した練習に取り組む様子】

（２）チームの技能に合わせたルールの工夫

チームの技能に合わせたルールの工夫として、ゴールの大きさを選択できるようにした。大きさはコーン２つ分、３つ分、４つ分を選択させることとした【資料２】。また、ハーフコートでのミニゲーム（１チーム３名）を行う際、ディフェンスの人数を１人～３人の中から選択できるようにした。さらに、オールコートでのゲーム（１チーム５～６名）を行う際、１人の生徒がドリブルで持ち込み、シュートするなど、他の生徒がボールを触れないようなことが起こらないために、パスの最低回数も設定させ、より多くの生徒がゲームの中でボールを触る機会を増やすようにした。

【資料２　ゴールの大きさを選択している様子】

（３）生徒同士が学び合いながら行う工夫

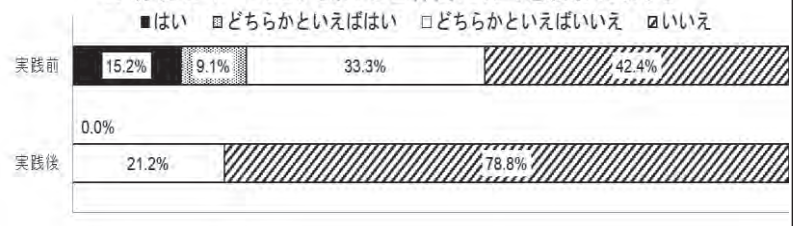
チームでコミュニケーションをとりながら準備運動を行うことができるように、ゴール型に必要な動きを説明した後、チームオリジナルのアップメニューを考える場面を設定した。メニューを考える視点としては、「楽しいこと」「平等に行うことができること」「心と体が温まること」「フットサルの基本技能に繋がる動きであること」とした。また、ゲーム中、生徒が自分たちのチームの動きを客観的に捉えることができるように、ゲームを行っていないチームの生徒がタブレットで動画を撮影することとした。その動画をチームで確認し、自分や仲間が活躍できたかどうかを確認し、どのような工夫をすれば自分や仲間がさらに活躍できるかを話し合えるようにした。話し合う視点としては、「楽しさ」「ボールを触る回

数」「パスの回数」「ボールを持たないときの空間へ走り込む動き」である。この視点に沿ってチーム内の話し合いを行い、ゲームを重ねることでチームの連携が高まっていくことを目指した。

3　成果と課題

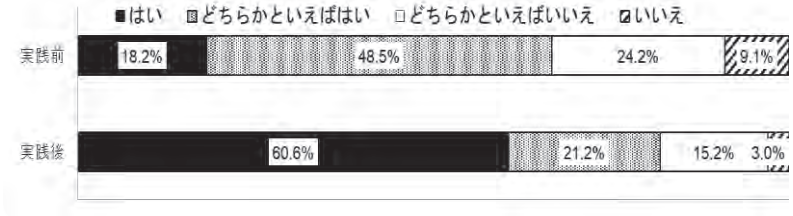
（１）成果

○　単元前後に行った「体育の学習に関する生徒アンケート（21項目質問紙アンケート）」において、「体育のゲームで、負けると仲間に文句を言われます」に対し、「いいえ」と回答した生徒が増加した。また、「はい」「どちらかといえばはい」と回答した生徒はいなくなった【図１】。これは、チームの課題解決をするために、動画を基に話し合う活動を設定したことで、ボールを持たないときのポジショニングや動きだしのタイミングなどを仲間と確認し、そのチームにあった攻め方を合意形成して、選択できた結果だと考える。



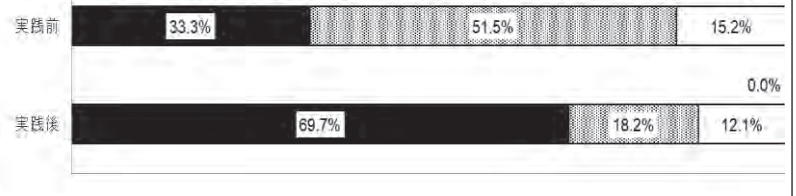
【図１　体育の学習に関する生徒アンケートの結果】

○　「体育のゲームで、たくさんボールにさわっています」の項目では、「はい」と回答した生徒が増加した【図２】。これは、個人やチームの技能に合わせて練習内容やゴールの大きさ、ディフェンスの人数を選択できるようにしたことで、単元を通して技能差にかかわらずボールに積極的に触ろうと意欲的に学習に取り組むことができた結果だと考える。



【図２　体育の学習に関する生徒アンケートの結果】

○　「体育の学習で、体格の違う子と協力できるとうれしいです」の項目では、「はい」と回答した生徒が増加した【図３】。これは、単元を通して男女差、技能差にかかわらず生徒同士が学び合う学習が展開できた結果だと考える。



【図３　体育の学習に関する生徒アンケートの結果】

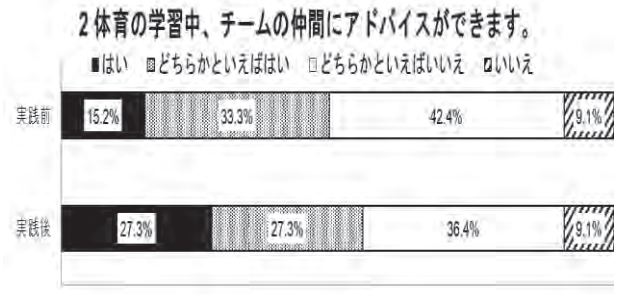
（２）課題

●　昨年度行ったバレーボールと比べて、体力差や技能差を「ルールの工夫」で補うことが非常に難しいと感じた。ゴール型でしかも足を使う競技のため体力差や技能差が顕著に表れることが理由である。個人の技能を高めつつ、用具やコート、ルールを工夫しながら、得意な生徒も苦手な生徒も楽しめることができるよう、今後も研究を重ねていくことが必要であると感じた。

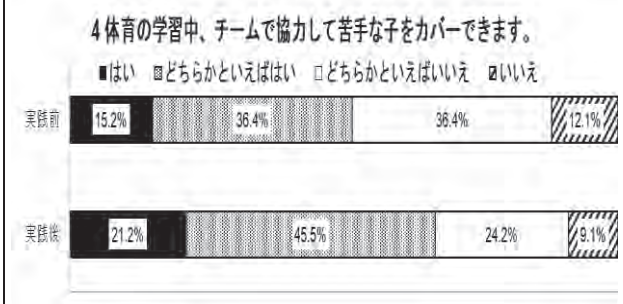
【児童生徒の変容】

〔Ⅰ　リーダーシップ〕

②

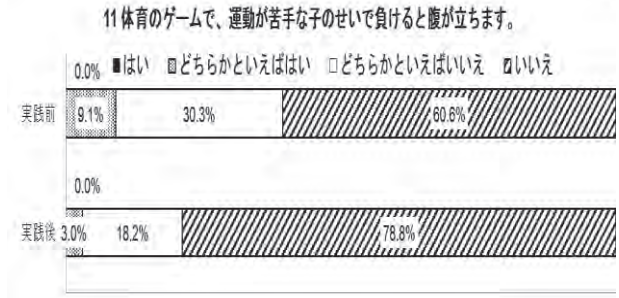


④

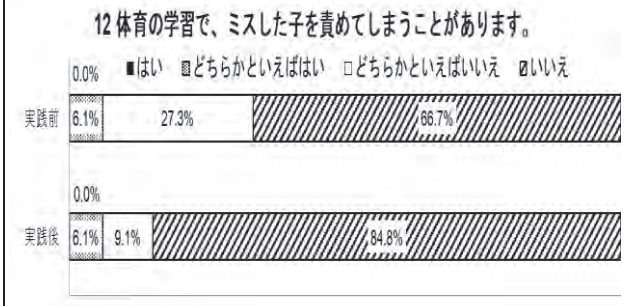


〔Ⅳ　失敗への排斥〕

⑪

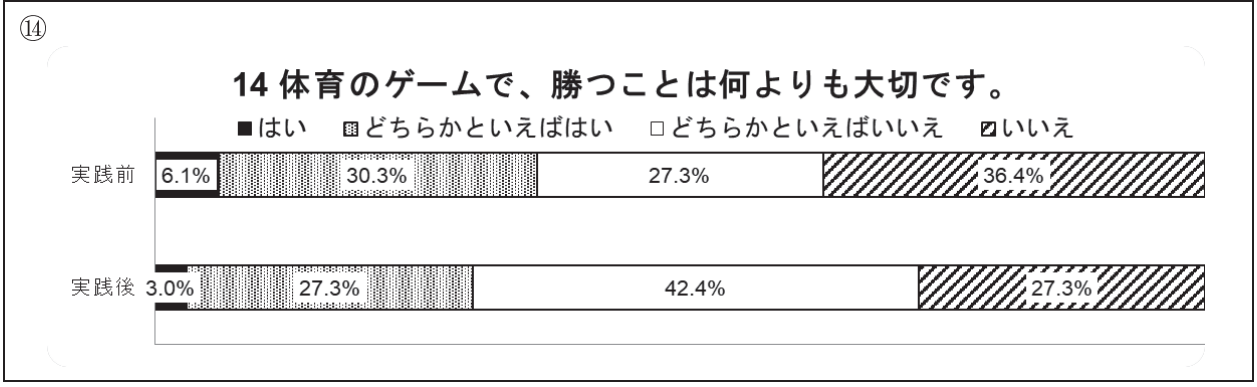


⑫



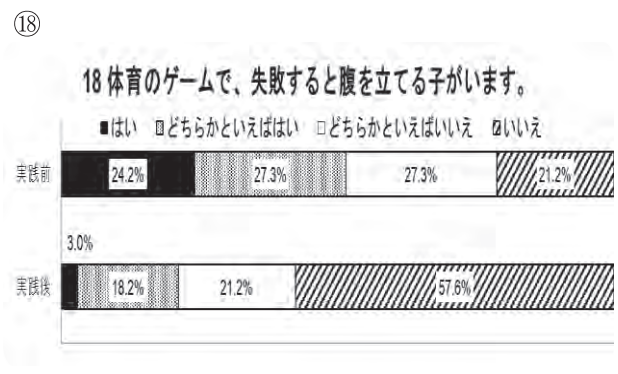
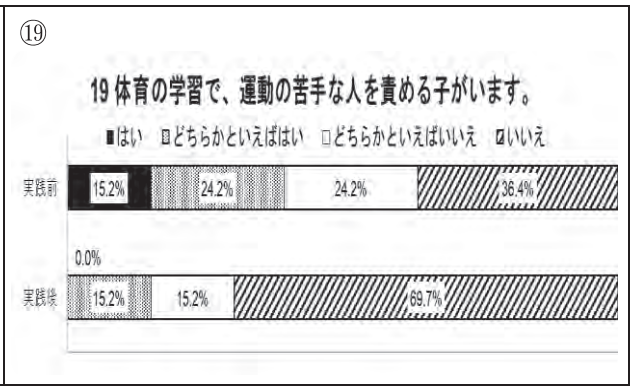
〔Ⅴ　過度な勝利志向〕

⑭



〔排除雰囲気〕

⑱



⑲